

# 南無妙物語

(心の一滴)

癌シリーズ

高木徳一

初秋の夕焼けが鯛雲の鱗に反射し、煌く。黄金色に色付き始めた大門横の大公孫樹にも、その反射光が達し、鮮やかな彩りを添える。

この寺は、東京都と千葉県との境を流れる江戸川と葛飾区の中川に挟まれた地に在る。本堂からは朗々とした読経が響き渡り、山田家の法事は後十分足らずで終了を迎える。

「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……」  
臨席者全員が思い思いの音程で唱和している。

突然、かんのむゆう神野無雄の背後にいる弟のみょうゆう妙雄が、黒数

珠を持った左手で口元を押さえた。次の瞬間、指の間からパアツと飛び散った物がある。鮮血が紫の袈裟を染め、勢い余った液体は青畳の上に連続的な赤斑点を作った。なおも、掌からも滴り落ちる。「キヤアー！」金切り声が無雄の鼓膜を激しく振動させ、顔は発信源に向いた。黒い着物姿の女性はのけ反りながら口をもぐもぐさせ、指差

しの上まであった。無雄の目の下に、妙雄がうずくまっている。「どうした！妙雄！」無雄は金色の座布団から膝を乗り出し、抱き起こす。眼はカッと見開き、天井の一点を凝視し、開いた口からは血の泡が吹き続ける。「血だー！」「口の中を拭いて下さい」と見事に禿げ上がった三十代の男性が、無雄に白いハンケチを渡す。無雄はそれを受け取ると、泡の中に押し込み拭い取る。それでは足りず、他からのハンケチも口に入れ込み、丁寧に拭いた。「誰かー、救急車を呼んで下さいーい！」

無雄が叫び上げると、庫裡との連絡口の傍にいた女性が、弾かれた様に重そうな体重を床机から持ち上げ、数段の階段を下りた。「どなたか、おりませんかー！」玄関前の広い廊下に面した十畳間でお茶を啜っていた神野華江と嫁の愛子は、只ならぬ声に驚き、同時に立ち上がって、障子を勢い良く開けた。「どうしました……」大柄な華江は彼女の震える手を握った。「は、早く、早く、救急車を

！」「だから、どうしたのですか。落ち着いて下さいな」「ほ、坊様が口から血を吐き出しましただ！」「えつ、何ですつて……。愛子さん、早くー！救急車を！……そう、気を静めて、一一九番ですよ、間違えずに。私は様子を見て来ますから」と言い放った華江は小走りに本堂の階段に向つて行く。残された愛子は頭が真つ白になった。倒れたのは夫、無雄なのか……。心の臓は更に高鳴る。「何、そのそしているのよ、一刻を争うの、早くして！」華江のドスのきいた低音が愛子の脳を圧する。そうよ、考えてる余裕は無いのよ、今は電話を掛ける事と気付き、玄關横の八畳程の事務室のドアを引いた。黒電話に飛び付き、受話器を外し、一一九と唇で繰り返しながらダイヤルを回した。

の質問に答えるだけでいいです」「……」「火事ですか、事故ですか、病人ですか……」「び、び、病人じゃ」「判りました。どんな状態ですか……」「く、口から血を吐いたじゃがな」愛子は現場を見ていないので、それ以上の状況は言えなかった。住所は、電話番号は、倒れた人の名前と年齢は、通報者の氏名と順を追つた質問に答えた。寺の名前も告げた。「良く、判りました。直ぐ、救急車を差し向けます。注意として、血や痰が喉に絡まない様にハンケチで口の中の物を常に拭き取り、喉の周りの着物を緩めて下さい。いいですね、身体は動かさない様に」「は、はい」愛子は受話器を置くと、責任を果たしたとの思いで、一瞬ホツとする。内の旦那が倒れたかの考えが再び湧き、ドアを閉めるのも忘れて駆け出し、本堂に入った。高い天井から吊るされた金一色の飾り物の下に人垣が出来ている。貴方、貴方なの……と、口の中で繰り返す。足音に人垣が割れた。我が夫、無雄が弟を抱

き抱えている像が網膜に結ばれる。「あなた」と言いつつ、地獄の底から引き上げられた自己を認識する。貴方ではなかったんだと。「貴方、救急車を呼びましたじゃ」「そうか。大丈夫、呼吸もしているし、脈もある」「あ、そうそう。窒息しねよ、口の中のものを取り出して、首の周りを緩めんじやと」「その点は抜かりなくやってる」「愛子さん、秀子さんに知らせたの・・」「いえ、未だじゃがねー」「何、ぼんやりしてるのよ旦那の一大事だつて言うのに・・」「はい、直に連絡しますじゃ」「愛子は踵を返し、階段を下り、庫裡の南面の廊下を渡り、隣接する自宅の二階建てを過ぎ、鍵の手に南下する廊下の先のドアを開け、二階建ての姉夫婦の建物に入った。「お姉さん、お姉さん、おるのー」大声を出す、物音一つしない。玄関には鍵が掛けられていた。愛子は元来た廊下を歩きながら思う。何よ、義姉さんのあの言い草はないじゃがねー。ぼんやりだなんて、あんまりじゃ。自

分の夫が吐血したのかとも思い、気も動転してたと言うに。何時も姐御肌を見せ、命令口調じゃが。行かず後家を通し、弟さ五人も育て、父親の世話もしてきたのは、負けず嫌いの気性にやけー、こなせたのかも。あるいは、自然とそう言う気性に変ったのかも・・。一面は姉としての義務感があるが、大部分は母への反発がそうさせている。そのバイタリティーには頭が下がるじゃが。心根は優しいが、言葉が独り歩きし、きつくなつていと解釈しているから、共同生活が出来ると、愛子はプラスにとっている。

本堂に戻り、義姉に伝えた。「玄関も閉っていたで、買い物に出掛けた様じゃがねー」「夫婦なんだから虫の知らせが有ってもよさそうなものなのにねー」双子の姉を非難されたこの言葉は、丸顔の愛子の胸にトゲとなつて突き刺さった。何も、公衆の面前で言わなくても・・。サイレンのけたたましい音が近付き、大門を潜る白塗りの車が目に入

った。石の階段下の賽銭箱の前に横付けされた。

白衣姿の救急隊員が車から降り、愛子の案内で本堂内に入る。妙雄の容態をチェックし、無雄からの聞き取りを問診表に埋めてゆく。妙雄は担架に乗せられ、車の中へと移された。「愛子さん、私と無雄が付き添いますから、貴方は留守番をして、秀子さんが戻られたら直に来る様に言つて。何処の病院でしょうか・・・」「それが・・・、来る途中、近所の救急病院に連絡したんですが、生憎、何処も満員で断られて、今、遠くを当たっている所です」「何よー、それじゃあ、弟が死んじゃうわよー」華江は絶叫し、隊員を睨み付けた。「姉さん、落ち着いて」「落ち着いてなんて言つてられないでしょ。急患は一刻を争うのよ。何、呑気な事を言つてるの!」「そうだ、兄さんの病院なら国立でかいから、きつと空いてる筈だ。済みません、文京区の東明大付属病院に電話して下さい。お願いします」

顎鬚を蓄えた運転手が連絡を取る。

「丁度、救急室が一つ空いたので、OKとの事です」「まあ、良かったー」華江は厳しい顔の中に、安堵の色を見せる。華江と無雄はそのままの服装で、後ろ扉から中に入った。子育て・水子観音像の慈悲の眼が高い所から見下ろす。救急車は新中川橋から水戸街道を疾駆し、新四つ木橋から向島を抜け、隅田川を越え、蔵前から上野、本郷へと向つた。妙雄は酸素マスクの下で、ぜえぜえと異様な音を発する。二人に会話は無い。眉根を寄せらるのみ。

「少し、遠いけど、しつかりした大病院ですもの、安心だわよ」到着間近になつて、華江が重い口を開き、妙雄に言い聞かせる様に言つた。「そうだ、大丈夫だよ、姉さん」無雄は隣の大きな顔の姉の充血目を見る。東明大の南門は、大きな木製の扉が左右に開いたまま。構内には、上野駅や御茶ノ水行きのバスが走っている。茶レンガ造りの外来

診療棟の裏手に在る救急センターへと、車はスピードを落とし、入って行く。妙雄は担架からストレッチャーに移され、救急室に消えた。付添い人

なんゆう

は長椅子に力無く身体を預けた。「南雄に知らせなきやあ・・」「兄さんは、今仕事中だよ」「何言ってるの！弟が死ぬか生きるかって言う時に・・」馬鹿な事は言わないでと言う顔をして立ち上がった。受付に声を入れる。「神野華江と申しますが、今、弟が吐血して救急室に入りました。この病院の産婦人科の教授をしている神野南雄は私の弟なので、直にここに来る様に連絡して頂けませんでしょうか・・」「神野教授のお姉様でいらつしやいますか。只今、電話を致しますので、どうぞ、お掛けなさってお待ち下さい」

長い黒髪を受付嬢が電話に口を当てている。

「神野様、神野教授は診療室、入院病棟、医局、教授室にもおられませんので、ポケットベルで呼

び出しております。ここにいらつしやる様、伝えておりますので、間も無く見えられると思います」

「有難う御座います」

十五分が経過した。緑がかったガラス張りの入り口の自動扉が開いて、髪を七三に分け、金縁眼鏡を掛けた長身の南雄が白衣をなびかせ、小走りに近付く。「姉さん、無雄、どうしたんだ！」無雄の朱色の袈裟を見て、只ならぬ気配を既に感じ取っていたが・・。「妙雄が血を吐いたのよ」「な、何いー」眼鏡の奥の眼が拡大する。「何故、近くの病院に行かない、手遅れになるぞ」「近所は満員だったのよ。あちこち寄ってたら一回しに合ったらそれこそ大変ですよ。咄嗟に、無雄が貴方の病院を思い付いたの」「そうか、それで症状はどうなんだ・・」「華江と無雄は自分で見た事、感じた事をそのまま告げた。

「重篤かも知れんな」南雄はポツリと言う。

二時間近くが過ぎ、救急室の緑の扉が横に開いて

ゆき、ストレッチャーが出て来た。「このまま、三〇五号室にお連れ致します。ご家族の方は、先生の方からお話が有りますので、どうぞ中の相談室にお入り下さい」点滴瓶が揺れながら、ストレッチャーは遠さかる。頬の盛り上がった小太りの長崎看護婦長は三人を相談室に招き入れた。程無くして、部長の松嶺三郎教授が小作りの顔を出した。

「おお、神野教授でござすな・・」不審な顔付きを前面に出す。「先生に診て戴いたのは弟の妙雄なんです」「そうですか、知らなかつたずら」二人は同年代で、月一回の教授会で顔を合わせている。

「婦長、弟さんに個室に入つて頂いたらどうか」  
「生憎、五部屋共塞がっております」「いいですよ、先生。お氣を使つて頂かなくて・・」華江は言葉を選んで丁寧に話す。「出来るずら。最近、国立と言えども、文部省から病院経営の健全化と言つて、赤字から黒字に転ずる様、厳しいお達しがあ

りますずら。軽症の鈴木さんに三人部屋に移つて貰えばいいだに。お金持ちは気晴らしに長逗留して居る事もありますし、また国会議員の口添えもあつたりして無下に断れませんし」  
「判りました。二、三日以内に、そう致します」「君、直ぐやろうずら」「はい、大急ぎで手配致します」婦長は洩々顔を少し見せながら出て行つた。入れ違ひに、細面の看護婦に伴われて、秀子が入室する。

「まあ、秀子さん、こんなに遅くどうしたの・・。旦那が大変だと言うのに・・」秀子は四十代に入つて、愛子より幾分頬肉が取れてきて、外観で双子の見分けが付く様になつてきた。「済みません。池袋のデパートまで買い物に行つていたものから・・」まさか、近所の買い物途中で、知り合

いの女に会つて、小一時間喫茶店で義姉を出しにしてお喋りしていたとは口が裂けても言えない。  
「よりによつて、そんな遠くまで・・」  
「姉さん、その話は後にして。先生、妙雄の嫁の秀子です。」

先生に良く診て頂いたからお礼を言いなさい」

「失礼致しました。妙雄の家内の秀子と申します。

主人が大変お世話になり、有難う御座いました。

それで、主人の具合の方は・・・」秀子は愛子と違つて、江戸弁を独学で必死に勉強し、福井弁を隠す事が出来る。「今から、お話ししようとしていた所だに！。どうぞ、お掛け下さいな」秀子は軽く会釈し、丸椅子に腰を落した。「取敢えず、止血の応急処置は済んだはず。気管支鏡で血液を認めたので、除き、胸部X線を撮ると、左肺に陰が見られた。念の為、内視鏡で消化管を観たが、何ら異常はねえ。恐らく、肺疾患と思われず。入院させて、CT写真や組織検査をするだに。最近、声が掠れたり、頭痛などは訴えておらんだか・・・」

「いえ、特にその様な事は聞いておりません」

「そう。それでは精密検査の結果が出てから治療方針を相談しましょうな。看護婦に聞いて、入院の手続きをお願いしますだ」先生、宜しくお

願い致します」「先生の弟さんですから、全力で当たらせて頂きますだに」身内四人は深々とお辞儀をして退室した。華江はその足で、正面玄関に戻り、入院受付に寄った。「慌てたもので、取る物も取り合えず来てしまいました」秀子は息を弾ませ、告げる。「神野教授の弟さんと連絡を受けております。明日でよろしいですから、保険証、印鑑、内金二十万円とこの入院保証書に記入して持参して下さい」書類を受け取ると、各科の診療室の上部にある三〇五号室に向つた。南の窓側のベッドに、気管が人工呼吸器に繋がれた妙雄が横たわっている。二の腕が太い看護婦が、いきなり人工呼吸器を外し、気管から痰をジュ、ジュと吸引する。その処置が終わった。「看護婦の青山です。宜しく願います」「こちらこそ、どうぞ宜しくお願い致します。妻の神野秀子と申します」

「姉の華江です。どうぞよろしくね」「兄の南雄です。宜しく頼みましたよ」「はい、産婦人科の神野

続きは  
完成版で  
お楽しみ下さい。